

ブタにおける膵実質と後腹膜リンパ流の検討

倉橋三穂 高木敏秀 三宅秀則 田代征記

徳島大学第1外科

膵癌は消化器癌のなかで最も予後が悪く、その原因として神経周囲浸潤、リンパ行性転移が高率であるという膵癌の生物学的特性が大きく関係している。われわれは膵癌の後腹膜浸潤に注目し、膵実質と後腹膜リンパ流の関係をブタで検討した。

目 的

ブタにおける膵実質から後腹膜へむかうリンパ流の関係を、膵-後腹膜固定モデルで検討した。

方 法

27 kg ブタを全身麻酔下開腹し、膵上縁を左腎前面にむかって剥離した。剥離時、膵被膜および後腹膜を損傷しないように注意した。遊離した膵先端を celiacomesenteric trunk を分枝する直上で吸収糸で大動脈-下大静脈間に縫着し、膵-後腹膜固定モデルを作成

した。7日後再開腹し、膵実質(膵頭部、体部の中点)に墨汁(CH40) 1.2 mlを緩徐に注入し、後腹膜腔へのリンパ流を観察した。

結 果

膵実質に墨汁(CH40)を注入したところ、膵前面の染色は明確でなかったが膵後面は強く染色され、膵-後腹膜固定部より頭側において、椎体前面の後腹膜腔の疎な結合織内のリンパ管が染色された。膵-後腹膜固定を行わないブタでは、傍大動脈-総腸骨動静脈間のリンパ節が染色された。

結 語

膵と後腹膜が固定された状態では、膵実質と後腹膜腔には広い範囲でリンパ網がみられ、膵実質から後腹膜へむかうリンパ流がみられた。